

## 学位(博士)請求論文講評

論文題目 小川太龍 『黄檗希運研究』

## 講評

小川太龍氏『黄檗希運研究』は、中国唐代中期の禅僧黄檗希運（?一八五〇頃）の伝記資料の精査と唐代禅宗思想における意義と位置付けを検討するという二つの課題を中心に据えて、従来研究の妥当性を再検討しつつ、その不備を正し、不足を補う作業を通して、黄檗像の新たな全体像を提示しようとした労作である。

伝記資料研究では、中国禅宗の歴史的展開に沿って、黄檗に対する評価が変遷して行く課程を実証的に追求した。つまり個別の禅宗文献、燈史書、語録に記された問答の具体的分析を通時的に追跡して、その変遷の内に思想的な特徴と、その変化を可視的に提示した。

また禅思想の研究では、黄檗に先行する馬祖道一禅師、百丈懷海禅師、あるいは後続する臨済義玄禅師（?一八六六/八六七）といった禅宗諸家の言説をとりあげ、禅宗思想の同一性と差異性の二面を前後する諸家の系譜の上に解明し位置付けようとした。

馬祖禅から黄檗の禅への思想展開では、「即心是仏」を核心として「作用則性」「平常無事」を展開する馬祖禅を、黄檗は「空に回帰する」という基本思想に基づき、継承しつつ発展させていたことを明らかにした。さらに、臨済との関係では、臨済義玄とその師である黄檗希運（?一八五〇頃）との思想を対比することにより、黄檗の禅が臨済の禅へ如何に展開したのかを明らかにした。もとより黄檗希運は臨済義玄の付法の師という重要人物であるにもかかわらず、歴史的事実の解明には何より資料的な制約が立ちはだかっていた。この点で、小川氏の研究は、禅宗文献の丹念な踏査を尽くして黄檗像の評価の変遷という文献的事実を剔出することに大きな前進を見せた。

また唐代禅思想の側面では、馬祖禅(洪州宗)の主張が決定的な意義を持ったことを確認しつつ、それに続く百丈、南泉、そして黄檗自身という馬祖以後の世代の思想的課題とそれぞれの特徴を整理して見せた。もちろん馬祖をはじめ、この時代の禅思想の重要性からいって、従来研究にも膨大な研究の蓄積があり、その理解と評価には簡単に決着を見ない意見対立は存在する。唐代の禅思想は馬祖を最重要人物とすることに異論は無いのだが、その周辺には個性際立つ禅

者たちが踵を接して登場する、文字通りの禅思想の百家争鳴、百花繚乱の時代であった。禅思想の総括と展望のためには、馬祖や黄檗といった祖師のみではなく、この時代の禅者たち群像を貫く思想史研究の周到な研究方法の確立と、明確な課題設定が必要である。この点では、小川氏の禅思想研究も未だ決定的な結論を得たとは言い難い点もある。

とはいえ総合的評価として小川氏が本研究で到達した文献研究の実証的手法とその成果や、禅思想研究で見せた従来研究への洞察や分析は、妥当なものであるといえ、この分野での今後の研究の大きな礎えとなることは間違いない。

この点をもって本審査は小川太龍氏の研究に対し、博士号の授与を認めるに異論は無いという合意を得るに至った。

中 島 志 郎